



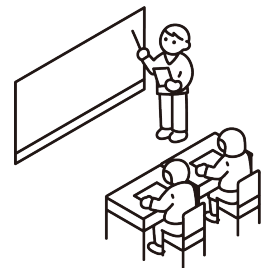
戦争の記憶が消えていく？

「父親が兵士だった」という人が、私達本部役員の中にはいます。海軍の横須賀基地で少年兵であったとか。また「叔父さんが満州開拓団の一員だった」という人もいます。茨城の内原で訓練を受け「満州（中国東北部）に行けば豊かな土地をもらえる」という国からの宣伝を疑うことなく海を渡って行ったとか。しかし、このような身内を持つ教職員は今や少数です。戦争体験の風化が進んでいます。若い教職員の方ならば、祖父母も戦後世代で、77年前の戦争は曾祖父母の時代という遠い昔のできごとになります。

こうして、戦争体験が風化し、過去の戦争が美化され、「強い国、美しい国」が大きな声となっていけば「戦争前夜」となります。平和学を学んだ方なら常識かもしれませんが、戦争をしかける人々は長期のプロパガンダを行い、国民の思想を好戦的、または無関心化することによって軍拡を続けます。現代ではその典型はロシアですが、各国にその萌芽が常にあります。我が国も戦前戦後を問わず、政治家の中に「偉大な日本軍（国防軍）」を求める声が一貫してありました。彼らがそれを実行できなかったのは、戦争の悲惨さを伝える人々が多かったからです。例えば、年配の方なら覚えていると思いますが、小学校で親子映画のチケット販売があり、1973年には前橋空襲を描いた映画「時計は生きていた」（文部省選定、PTA推薦）が上映されました。戦後の教職員組合は「子どもたちを戦場に送るな」というスローガンを前面に出し、戦争の悲惨さを伝え、戦争に反対する取り組みを行ってきました。

政治的中立性を欠いている？

ところが「教育の中立性を侵している」といった批判（数年前にも、ある議員が自分の所属する政党のHPを通じて通報するようSNSに投稿した）を行い、こうした平和活動が堂々とできないような空気を作ろうとする動きもあります。いわゆる「政治的中立性」を錦の御旗にして教職員を萎縮させるという方法です。けれども、日本政府は国連の「武力紛争における児童の関与に関する児童の権利条約選択議定書」を批准しているので、「子どもたちを戦場に送るな」という主張は国際法を遵守する内容であり、これを批判する方がむしろ「政治的中立性」を欠いているとも言えるのです。しかし、憲法9条遵守を宣伝していた文科省（旧文部省時代に『あたらしい憲法のはなし』を発行）が方向転換をし、各都道府県教育委員会の姿勢も後ろ向きになってしまえば、多くの教職員も萎縮、忖度するというものです。



9条の発案者は幣原喜重郎！

また一方で「今の憲法はアメリカからの押し付け！ 改正すべき！」という議論もあります。憲法押し付け論については諸説ありますが、最近の知見を一つ紹介します。

「平和憲法は時の首相幣原喜重郎が考案し、マッカーサーを説得して『押し付け』という形式で実現させた」というものです。幣原は『「国境の向こうは敵」という発想に立つ限り軍拡競争は止まらない』と考え、平和憲法を持って外交活動を活発に展開し、国連と国際法による安全保障を構想しました。これは単なる机上の空論ではなく、日本に続いて平和憲法を施行したコスタリカはこれを実際に行いました。83年には周囲3カ国の戦争を終わらせ、87年にノーベル平和賞を受賞。2017年には国連核兵器禁止条約を提案して賛成122で採択されます（日本は不参加）。一方、日本政府、与党は9条を持ちながら、それを生かした外交活動を行わず、平和憲法は無意味と国民に思わせている、というわけです。（そう言えば、教職員になってから憲法や国際法の研修がどれだけあったか？）政府がどうであれ、私達教職員は自主的研修を続け、世界の先進的な取り組みに学び、世界の子どものために平和な世界を目指していきましょう！ 組合は各種学習会も行っています。参加してみてください。

学習会 「沖縄の過去と現在」

2022年8月2日（火）16:00～17:00 群馬県教育会館3階

群馬高教組のHP / <https://ghtu.org> こちらからどうぞ ⇨

